

第5回 旭川市民文化会館整備基本計画検討会 会議録（要旨）

会議名 第5回 旭川市民文化会館整備基本計画検討会

開催日 令和7年2月17日（月）
午後1時30分から午後3時40分まで

開催場所 旭川市民文化会館 2階 第2会議室

出席者 参加者 全12名のうち11名出席
（敬称略）五十嵐 真幸，大口 優，佐藤 淳一，鈴川 雄太，
西川 祐司，松倉 敏朗，水野 雅文，南 裕一，
宮田 健一，森 傑，森 禎宏

事務局 3名出席
社会教育部 文化ホール整備担当部長，主幹，主査
事務局支援 11名
北海道大学大学院建築計画学研究室

会議の公開非公開の別 公開

傍聴者数 1名

会議資料 別紙のとおり

1 開会

2 議事

進行役：

- ・ 本日は，前回皆様からいただいた様々な御意見やアイデアを具体的に膨らませ，さらに「活動」のイメージやアイデア，バリエーションをどんどん増やしていただきたい。
- ・ 今回はまず冒頭でホール有識者からレクチャーをいただき，皆様に議論いただく上での刺激としたい。
- ・ レクチャーでは「どのような活動が行われているか」といった施設の利用のされ方や，そうした点を踏まえた，運営者側の視点から見た「運営上の工夫・苦勞」などについてお話しいただく。

2 (1) ホール有識者によるレクチャー

2 (2) 前回内容の振り返り

2 (3) グループディスカッション

(「新文化ホールで行いたい活動」と「活動を行うにあたっての空間アイデア」)

2 (4) ディスカッション内容の共有

(グループA)

共用部の使い方や、市民が気軽に立ち寄れる施設という観点に重点を置き、議論した。

◆ 市民が気軽に立ち寄れる開放的なエントランス

- ・ エントランスを使用して、実験的なコンサート、少人数でのアンサンブルなど、ロビーコンサートを開催できると良い。
 - 「誰でも、いつでも」無料で開催し、無料で鑑賞できる環境とすることで、出演者には気軽に発表できる場、市民には何気なく文化芸術に触れ、関心を持つきっかけを生む場としたい。
 - ピアノを自由に演奏できる時間を設けるなど、エントランスに音があふれる環境を作りたい。
- ・ 2階も広く市民に開放する場合、多くの人が同時に移動できる大階段が必要になる。
 - 階段の途中に踊り場のような「スキップフロア¹」を設け、開放感を演出する方法もある。
 - 1階エントランスでロビーコンサートを行っているとき、見下ろす形で鑑賞可能な空間としても活用できる。ゆかりのない団体等は真正面から鑑賞しづらいといった心理的なハードルを緩和し、気軽な鑑賞を促す効果も見込める。
- ・ エントランスをオープンにし、様々な場所から入ることができる形とするのは、不特定多数の人が滞在する施設として適している。
 - ガラス張りなどで外から中の活動が見えると、開放感が生まれ、入りやすくなるのではないか。
 - 単純にガラス張りというだけでは、1階には入りやすいが2階には入りにくいという場合もある。

¹ スキップフロア

：建築物の各階の中間にずらした床を設け、上下の空間を分割又は結合する形式。1階の半階上のものは1.5階、2階の半階上のものは2.5階などと表現する場合もある。

→ 現市民文化会館のエントランスは、入口付近～大ホールまでの動線上は天井高が低い印象。入口付近から吹き抜けなど天井を高くすることで、開放感の演出や、2階まで含めた入りやすさにつながるのでは。

- ・ コンサートや演劇等の催事は、関心がない人に周知することが難しい。新文化ホールは「用事の有無に関わらず、気軽に立ち寄れる場」そして「文化芸術に関する情報発信の場」として整備し、多くの人が文化芸術に触れるきっかけを作る場としたい。
- ・ コンベンション開催時、来場者にわかりやすいよう、受付はエントランスに設置する場合が多いため、エントランスから大ホール・小ホール・会議室へ直接アクセスできる動線が望ましい。
 - エントランスは開場や各発表間の待機スペースとしても使用したい。
 - 国際会議等では物産展や企業ブース、書籍売場などを併設する場合もあり、これらをエントランスやホワイエに設置したい。
- ・ 現市民文化会館でコンベンションを開催する際は、建物全体を貸切ることが多い。
 - ホールが2階にある施設では、2階を貸し切ってコンベンションを開催し、1階は通常通り市民に開放している場合もある。
 - コンベンションに限らず、催事が行われている時も市民が気軽に立ち寄れるよう、境界となる場所はセキュリティを管理しやすい構造としたい。
- ・ 屋外の動線は、6条通側や緑橋通側など、各方面へ通り抜けられると良い。また、当該動線を通る際に、内部の活動が張り出して見えると、活気を演出できて良い。
 - 建物のエントランスが多くあると、市民が気軽に内部を通りやすくなる
 - どこからでも入ることのできる、開放感のあるホールが望ましい。
- ・ 飲食機能は匂いが発生するため、外壁に面した位置、又は外部に突き出たような位置が良いと考える。屋外からも直接入れると良い。
 - エントランス（共用部）側へはみ出すように、机・椅子等があると良い。
 - 隣接する総合庁舎に食堂やコンビニがあるため、新文化ホールには軽食が取れるカフェ等があると良い。

◆ フレキシブルに利用可能なホール・リハーサル室

- ・ ホールの面積は席数次第で変わってくると思うが、公会堂が建設から65年を迎える現状、近い将来に公会堂が使用できなくなることが想定され、旭川市はその方針を持っていると聞いており、公会堂の機能継承も踏まえて小ホールの席数を決める必要がある。

- 可動式の座席によって席数を変更可能としている施設や、積層式で1階席だけ使用する場合に使用料を安価にしている施設等もある。
 - 座席数は、数字として表れる利用実績の分析に加え、現ホールを利用している団体等に対し、数字には表れない利用の実状等についても丁寧にヒアリングを行った上で定めるべきである。
- ・ 現市民文化会館は土日にホール利用が集中してしまっているため、利用が分散できるような工夫が必要である。
 - ホールとして利用できる室が3つ以上あることが望ましい。
 - リハーサル室の面積を大ホール舞台と同等に設定し、大ホールのリハーサル需要を満たしつつ、平土間の小ホールとしても使用できると良いのではないかな。
 - 照明設備・音響設備の整備も必要となる。
 - ・ リハーサル室は、大ホール用と小ホール用があると良い。
 - 小ホール用については、会議室と兼用することも考えられる。
 - ・ 飲食機能や諸室を少しずつ外に張り出し屋内空間を広く確保することで、ホールや共用部の面積を確保できると良い。
- ◆ **複数用途への対応が可能な活動室**
- ・ 現市民文化会館の会議室は稼働率が低いことが課題。フレキシブルな使い方ができるようにすることで、稼働率も上がるのではないかな。
 - 楽屋と会議室（活動室）やリハーサル室を兼用としている事例もある。
 - コンベンションでの利用時を考えても、主に使用するのは大ホールや小ホール、大会議室といった大きな諸室であり、小さな会議室については、控え室や分科会等での利用となることから、楽屋との兼用は支障ないと考えられる。
 - 兼用とする場合、現市民文化会館リハーサル室と同様、ユーザー（一般来館者）側とサービス（主催者）側、双方から出入り可能にする必要がある。
 - ・ 活動室用の備品（机・椅子など）は倉庫室に置き複数室で共有し、倉庫室に備品がない場合は活動室として使用できるなど、フレキシブルに利用可能であると良い。
 - 倉庫室は、利用者が一部空間を借り、楽器などを設置できると良い。
 - ・ 「会議室」という名称になると「会議以外の目的で借りてはいけない」という印象を招くおそれがある。「活動室」や「レクリエーションルーム」など、様々な目的で利用できることを強調した室名が望ましい。

◆ **諸室や共用部と一体利用が可能なホワイエ**

- ・ ホールで催事を開催していないときに、ホワイエを一般に向けて開放できると良い。
- ・ ホワイエを広く取り、雨雪の時も外で待つことなく中で滞在できる空間が良い。
 - 学会などコンベンション開催時も、ホールや会議室に入らず、その前の空間（廊下やホワイエ）で話し込んでしまう事例は多い。
 - ホールだけでなく、会議室（活動室）もホワイエに面した配置とし、一体的な利用も可能であると良い。
 - 「諸室と共用部のつなぎ方」が大事になる。

◆ **展示に必要な機能・面積を確保しつつ、多目的に活用可能な展示室**

- ・ 不使用時にエントランスの一部として使用できる構造や、展示以外の目的で使用する際はホールの的に活用できる構造とするなど、展示空間を確保しつつ、エントランスも広く確保できるよう工夫したい。
 - 展示室を囲う壁を透明にし、展示のためにエントランスと区切る必要がある場合はカーテン等で閉じることができ、区切る必要がない催事の場合や、不使用時には、エントランスと一体的な空間として使用可能とするといったことも考えられる。
- ・ 書道の展示を考えると、天井高は3.5～4メートルほど必要。
 - 1階に配置することで「エントランスの天井を高く取りたい」という部分と整合が取れる。
 - 天井高や搬出入動線が確保できていれば、1階において配置の自由度は高い。

◆ **市総合庁舎との連携**

- ・ 市総合庁舎1階の「市民活動スペース」や「シティプロモーションスペース」と連携することで、情報発信拠点として機能することも可能なのでは。
 - 庁舎とホールが隣接し、ロビーを共有している施設は全国にたくさんあるので、互いの機能を生かし合える可能性はあると思う。
- ・ 前回、市総合庁舎と新文化ホールの上に屋根をかけてピロティとし、雨や雪に濡れずに移動できるようにしたいとの話もあったが、この空間を生かして屋外でガーデンコンサートなどができると良い。
 - 市総合庁舎前の空間も活用できると良い。
- ・ 市総合庁舎と新文化ホールの間、第三庁舎跡地に整備が見込まれる駐車場からの動線沿いに、活動室や小規模な展示機能が張り出すように存在する構造も考えられる。
 - 冬期は、できるだけ暖かい屋内を通して移動できるよう、市総合庁舎の利用者が新文化ホール内を通して移動すると想定される。屋内の動線沿いに活動室や展示室等がある形も、多くの人の目に触れる機会の創出につながるのではないかな。

◆ キッズスペース

- ・ 現市民文化会館は、催事がないとき子どもを気軽に連れてくるような場所ではない。
→ 若い世代、子育て世帯が気軽に立ち寄れるよう、キッズスペースがあると良い。
→ 子育て中の世帯にとって「あると安心」である一方、子どもたちの声など、音の面で配慮は必要になると想定される。
- ・ 託児機能として保育士を常駐させるほどの需要が見込めるかは未知数であるため、必要に応じて、催事の主催者が託児所を設置可能な室を設けられると良い。
→ 例えば活動室の一室を「子ども活動室」とし、催事があるときは託児スペースに、催事がないときは一般利に開放するといった方法も考えられるのでは。
- ・ 現状、街中に子供が一人で気軽に立ち寄れる場所は少ないため、そうしたスペースがあると良い。
- ・ 新文化ホール単独で考えるのではなく、全市的な考え方の元で整理する必要がある。

(グループ B)

施設の顔となり、様々な人々が集まるエントランスから検討を始めた。

◆ 来館者を迎えるエントランスでの活動

- ・ 吹奏楽のアンサンブルや、合唱、ストリートピアノなどがエントランスで行われていると、来館者が立ち寄って楽しめるような場所になり、良いのではないかな。
- ・ 何をするにしても、エントランスには一定程度の広さが必要。移動可能なテーブル等であれば良いが、部屋が配置されると狭くなる。
→ 平塚市の文化ホールでは諸室がガラス張りで、カーテンを閉めて利用することも、カーテンを開けて開放感のあるエントランスを構築することもできていた。
→ 展示室や小ホールを、細かく分節することも、エントランスと一体化して利用することもできるよう整備することで、エントランスの面積を確保しつつ、様々な規模の活動にも対応できるのではないかな。
- ・ 現市民文化会館もエントランスは広いが、机や椅子がある程度。単に広い空間があれば良いわけではなく、「空間をどう使うか」ということが課題。
→ 「諸室を分散して配置する」という手法は、広い空間に活動を散りばめ、にぎわいを作り出す方策の一つである。
- ・ エントランスから2階に上がった壁沿いに机が並んでいて、勉強空間があると良い。
→ 閉鎖的で周囲の目が届かない空間にはならないよう、配慮したい。

- ・ 隣接する OMO7 では「旭川，スキー都市宣言」として積極的にプロモーションを行っており，外国人観光客が多数訪れている。宿泊者がホテル内に留まらず，町を散策して飲食してもらう工夫などもされており，まちの活性化に寄与している。こうした施設が隣接する点は強みであり，何かしらの相乗効果を狙っていきたい。
 → 地元の文化発信など，PR に生かしたい。雪景色やスキーといった親和性のあるアートを展示するなど，ホテルを訪れた人が興味を持ち，ホールにも来館してくれるような仕組みを考えられると良い。
 → ホテル側との打ち合わせやマーケティングを行い，宿泊者や外国人観光客が関心を持ってくれるよう，恒常性のあるコンテンツとしたい。
- ・ 興行のときなど，エントランスに並ぶ人を収容可能な広さがあると良い。
 → 自由席の催事では，特に多くの人が並ぶと想定される。

◆ 「活動」を通して「交流」を生む場

- ・ 公共施設は無料で利用できるため，学生など若い世代の滞在場所としてポテンシャルがある。
 → 「部活動の地域移行²」を国が進めているが，文化芸術系の部活動においては，文化ホールでの活動を推進する自治体も出てきている。
 地域移行の目的のひとつとして「施設等の中で生じる課題や問題を地域社会と共有することで，解決や相乗効果につなげていくことを目指す」というものがあり，学生が「安全に過ごせる場所」という視点も大事になってくる。
 → まちの中心に位置する施設として，学生が集まり，小ホールや展示室等が練習場所になるのは，とても良い使い方であると思う。学校の垣根を越えて集まり，合同で練習するといったことも考えられる。
 → 活動の場を閉じられた諸室空間内に限定せず，ホワイエなどのオープンな空間を用いることで，学生たちが活動している様子が見えれば，活気が感じられて良いかもしれない。
 → 外国人観光客も受け入れて，一緒に活動に参加できるといい。茶道や華道，書道など，日本の伝統的な文化活動には，外国人観光客も関心を持つのではないかと。「異文化交流」にもつながり，学生にとっても良い経験になると思う。
 → ときわ市民ホール等ではもう少し上の年齢層の方々がサークル活動をしているが，こうした施設等と連携して「多世代交流」を生むこともできるかもしれない。

² 部活動の地域移行

：「学校部活動」を社会教育の一環，スポーツ基本法や文化芸術基本法上の「スポーツ」「文化芸術」と位置づけ，学校外の地域クラブ活動主体が行う「地域クラブ活動」に代替させていくこと。

- ・ ふらっと来て、活動が目につくととても良いと思う。
→ 学生が練習しているところを市民が日常的に見ていれば、本番はもっと応援に来てくれると思う。
→ プロのアーティストもふらっと顔を出せるような場所になれば、同様に応援したいという気持ちを生み、公演に関心を持つきっかけになるかもしれない。
- ・ ラジオ放送局とか見えるといい。

◆ 施設ににぎわいをもたらす飲食店

- ・ 計画段階での要望に基づき、飲食機能を設けたものの、徐々に経営が厳しくなり撤退してしまったホールの事例は、全国各地に数多くある。
→ 撤退してしまうと、その空間ががらんと空いてしまい、活気のなさを感じさせる上に、デッドスペースになってしまう。
→ 市庁舎側のレストランとの役割分担が必要。食堂は市役所に任せるという考え方もある。
→ 常設的な飲食機能でなく、公演時にキッチンカー等が来れるよう、仮設的な機能を設けておくなど、持続可能にするための工夫が必要。
- ・ 夜の演奏会の前や、休憩時間にワインやビールが飲みたいといった需要はあるので、そうした需要を考えると、施設内に飲食機能がほしいという希望も理解できる。
- ・ 話題性のある飲食店が入ってくれば、飲食のために施設を訪れる人もいるはず。何かしら、施設を訪れるきっかけになるような要素があると良い。

◆ 公演時以外にも積極的に利用されるホワイエ

- ・ 現市民文化会館のホワイエは、公演時の利用に制限されている。色々な空間につながっているんで、企画の開催や、市民の滞在で利用できるのではないかな。
- ・ 現文化会館では、催事がないとエントランス～ホワイエに誰もおらず、入って良いものかどうか分からない。
→ 何か店舗などがあり、出迎えてくれるような雰囲気があれば入りやすそうである。
→ 出迎える雰囲気を形成するのが必ずしも施設のスタッフである必要はなく、市民であっても良いのではないかな。常にどこかで誰かが活動している様子が見えることで、活気が生まれ、出迎えられる雰囲気も形成されるのでは。
- ・ ホワイエを日常利用できるようにした場合、誰がその場所を管理するのだろうか。
→ 全ての場所に細かく人員を配置することは現実的でないんで、ある場所から全体を見通せるような構造であれば、少ない人員で広い範囲を見守ることもできる。

- 施設全体のコンシェルジュ（総合案内）のような人を配置する場合もあるが、必ずしも施設職員である必要はなく、ボランティア等の場合もある。
 - テナント（カフェ、フォトスタジオ等）やサテライトオフィスなど、施設機能と相性の良い民間企業が入居することで、企業活動を行いつつ、管理してもらう方法もあるのでは。施設の家賃収入にもつながると思う。
- ・ ホワイエに行くきっかけや理由がなく、利用を促すのは難しいと感じる。
 - ホワイエは元来、中休憩のための空間であり、飲食機能などを配置することで、催事がある場合もない場合も、アクセスする目的を生むといった方法もある。
 - 市総合庁舎の9階には展望ラウンジがあり滞在可能な空間がある。こちらは眺望の良さや、上から議場が見えること等が訪問の目的になっている。
 - ホワイエからも、他の場所から見えない部屋や活動の様子などが見えると、そこへ行きたいという気持ちにもつながるのではないか。
- ・ エントランスを共用部（滞在可能な空間）としたときに、ホワイエまで同様の空間として開放する必要があるのか。旭川にゆかりのある方の作品展示スペースとする等、エントランスとは異なる機能や、特別感を持った空間とするべきではないか。
 - ホワイエを共用部としてでなく、ホール不使用時に諸室の一つとして貸出する、といった考え方もある。
 - ホワイエやエントランスがそれぞれどの程度の広さになるか、という部分次第であるかもしれない。
- ・ ホワイエには「異文化交流」「多世代交流」「プロのアーティストとの交流」等につながる場、利用者が互いに顔見知りになれる場としての可能性があるかもしれない。
- ◆ **コンベンションを盛り上げる特別な演出のある会議室**
- ・ コンベンションでは会議室をクローズドに利用するが、会議中に中庭から四季の風景が見えたりすると、リラックスでき、また旭川らしさを感じられ、特別感を演出できて良いと思う。
 - ・ コンベンション利用時は、会議室の中で食事をしたい。清掃代を徴収するなど、マネジメントの手法はあると思う。
 - ・ 大会議室をリハーサル室として活用するような方法も考えられる。その時には、人の目に触れやすい場所になるよう、配置も考えなければならない。
 - 資料4のパースにあるように、階段の周りに諸室が配置されている様子は、活動の様子が見え楽しそうだが、足が不自由な方などにとっては、行き来しにくいのではないか。

◆ 見せることで、敷地東側にも施設の顔をつくる

- ・ 敷地東側には、楽屋に付随するアーティストラウンジやリハーサル室を配置し、そうした空間が外からも見える（カーテン等で隠すことも可能）ことで、施設の顔の一つになるのではないかな。
- ・ 楽屋はシンプルに並べて配置し、必要に応じて通り抜けられると良いのではないかな。

進行役：

- ・ 本検討会も、令和6年度の開催は今回で最後ということで、今年度の検討内容について、ここで総括させていただきたい。
- ・ 令和6年度の検討会では、「①ゾーニング」と「②活動と場所との関係」という2点に焦点を当て、議論を行ってきた。
- ・ 「①ゾーニング」に関して、最も大事なことは建設予定地が決まったこと。場所が決まったことで、公共施設を建設するにあたり、敷地をどのように使うかという視点から、敷地全体を「サービスゾーン」と「ユーザーゾーン」に分けて考えた。
- ・ その検討を基に、どのような活動をどこで行いたいのか、という「②活動と場所との関係」について、意見交換を行ってきた。
→ 「②活動と場所との関係」については、一見すると誰でも発言できそうに思われるが、本検討会で提示された意見は、いずれも「①ゾーニング」の内容を下地として提示いただいており、一般的なアンケートの結果などとは、熟度が大きく異なる。
- ・ 今年度のまとめとして、今回出された意見を基に、バージョンアップしたモデルを北海道大学大学院建築計画学研究室で作成する。
→ モデルの作成作業については、北大側に一任いただきたいと思うが、よろしいかな。

参加者：

（反対意見なし）

進行役：

- ・ では、モデルの作成については進めさせていただき、別途御報告させていただく。
- ・ 最後に、令和7年度に検討を進める上での大まかな考え方について御説明したい。
- ・ 令和6年度の検討会で検討してきた内容を「5W1H」に例えると、
「When（いつ）」「Where（どこで）」
「Who（誰が）」「What（どんな活動を）」
という部分となり、これらをリンクさせながら考えてきた。
→ 残る課題は「Why（理由）」と「How（方法）」の2点になる。

- ・ 「Why (理由)」については、基本計画を定めていく上で根拠となる事項の整理であり、本検討会で皆様からいただいている様々な意見もこの根拠の一つになる。
- ・ そのほかに、データとして判別可能な「利用実績」と、データだけでは判断できない「潜在的なニーズ」などが考えられ、これらは次年度以降にもう少し補強していくことが必要になるものと見込んでいる。
- ・ 一番大事なのは「How (方法)」, すなわち「どうやって実現するか」という部分であり、この点をきちんと議論しておかないと、建物だけが出来上がったものの、運営が回っていかない、といった状況になりかねない。
- ・ 「旭川市での実現可能性」という部分も含めて、しっかりと検討する必要がある。
- ・ 以上を踏まえ、事務局と相談の上、骨太の良い基本計画となるよう、今後の検討を進めていきたい。
- ・ 参加者の皆様には、令和7年度も引き続き御協力をお願いする。

事務局：

- ・ 令和6年度の検討会については今回で最後となるが、これまでの検討状況として、本検討会での議論の内容を中心に、市民に情報発信をしたいと考えている。
→ 模型を活用するなど手法も含め、各委員の皆様へ事前に報告させていただく。
- ・ 令和7年度検討会の開催予定については、後日改めて御連絡させていただく。
引き続き、令和7年度も御協力をお願いしたい。

3 閉会